

新資料にみる上田城と城下町絵図 —真田の上田城絵図と明治廃城後の城下町絵図—



1. はじめに

信州上田は大阪市と城郭姉妹都市を提携されている。いわずと知れた真田幸村つながりである。来年の大河ドラマ真田丸で上田や真田郷は六文銭がたなびき、人気の上にさらに活況を呈している。富原文庫が発足のきっかけとなった平成10年の「戦国時代の城と合戦絵図展」は上田商工会議所の主催により、会議所5階の大ホールで戸石城をパノラマのように眺め、約130点の真田と武田の古城絵図、合戦図、錦絵を紹介した。この展示会は池波正太郎真田太平記館開館記念で計画され、地域活性化を目的とされた。近年も3年続きで上田市真田氏歴史館を会場に「真田家の城郭と戦歴展」「大坂冬の陣展」「大坂の陣展」を開催し、来場者1万人近い盛況であった。富原文庫が所在する上州安中は武田、上杉、北条の騒乱地であり、信州軽井沢とは隣接しているため、真田の多くの城郭展示企画に対応できる。これからもご期待いただきたい。

上田城跡は上田市のシンボルであり、全国ブランドの真田も相まって、地元上田市では保存管理、整備基本計画、史料調査と非常に力を入れて対応されている。本丸東虎口櫓門の復元、櫓の整備と非常に美しい城跡である。将来は資料が整えば本丸櫓すべての復元も計画されている。そのための調査

も文書、古絵図、建築指図、写真、絵葉書と多岐に及ぶ。現在目にする上田城は寛永3年(1626年)仙石忠政によって築城された遺構で、そこに真田の姿を見ることは出来ない。さらに、宝永3年(1706年)年松平氏が入封し、明治維新を迎える。この間多くの修築工事が行われるが基本は仙石氏の上田城である。そして、仙石氏の上田城については、城郭基本図といえる正保城絵図や修理絵図が残され、さらに、多くの絵図によって、その変遷はほぼ明らかにされている。今回、先に上田市が調査に来られた絵葉書以外の古絵図、古典籍、錦絵、古地図を整理し、真田の上田城絵図について、その真偽を調べ、さらに、富原文庫の基本図である明治政府陸軍省築造局作成「陸軍省城絵図」とも絡み、明治6年長野県庁から大蔵省に提出された上田絵図について紹介することとしたい。

2. 真田氏上田城

豊臣の大坂城が徳川元和大坂城によって、完全に埋没されたように、真田の上田城も関ヶ原合戦の後、破壊され、城番が置かれ、さらに、真田信幸(信之)の所領となった。元和年間1615～1623年の絵図では城地は畑となり、空堀の痕跡が残るのみである。発掘調査により、現城跡本丸、二の丸、小泉曲輪から豊臣系城郭の特長とされる金箔瓦の出土があり、真田の上田城

が仙石氏の上田城と重なることは実証された。

では、真田の上田城とはどのようなものであろうか。築城は武田氏滅亡後、織田信長の本能寺の変横死を経て、真田郷にいた昌幸が戸石城に移り、上杉景勝、北條氏直、徳川家康さらに、天正12年には沼田割譲を承知せず上杉景勝に臣従する。上田城は天正11年3月ごろ、徳川陣営の時に取り掛かり、4月13日にその知らせを受けた上杉景勝が「真田が、海士淵に城を造り始めたとのこと、追ひ払うように」という書状を島津左京亮に充てていることから、築城目的が对上杉であり、天正11年真田昌幸の築城であることは明白である。ただ、文化庁の正保城絵図上田城の説明では、「本城はもと海野氏一族常田氏の館を真田幸隆が改修し、天正11年より、真田昌幸がさらに改修を加え」とあり、幸隆の時代の上田城の存在を示唆している。幸隆の上田城はさらに謎のままである。

3. 真田氏上田城絵図

築城時期と城地は確定されたが、構造はどうであろうか。ここに1枚の絵図がある(図1)。

『信州上田 上田ノ庄尼ヶ淵城ト云
尼ヶ淵城ト云初海野氏後真田氏居ス村上ノ為二亡ヒ頓テ甲領ト成テ彈正幸隆再注近郷伊勢崎二此城ツナギノ砦アリ故二本城共二伊勢崎ノ城トモ云小県郡二在リ
正治日軍鑑云真田居城吾妻按スル二戸石ノ近所ニアカツマト云在所アリ又上州ニモ吾妻郡アリ何レ沼田迄真田領ナレハ此ニヶ所ノ内イツレモ定カタン後学可考
正治云古ノ城ハ上田ヨリ一里北戸山ニアリ一説初村上氏居城ト云此城図者真田幸隆ノ代二築城西向大手平城東ハ切岸川二副
(以下800字省略)
服部直方図之 岡田藤原勝英 静幽正治写之』

この絵図は調査の結果、伊那伊豆木旗本小笠原藩8代小笠原長著家臣、甲州流軍学者加藤正治によるものと判明した。加藤正治は寛政7～11年(1795～99年)伊那の古城を実地調査し、縄張を書き留めている。今から220年前

の城跡の状況である。『甲州流兵法』によれば、「加藤正治は江戸麻布で明和8年(1771年)に生まれ、天明4年(1784年)小笠原家に仕、寛政年中甲信越東海の戦跡地利を探る。文化2年(1805年)小笠原家を辞し」とある。服部直方は不明であるが、岡田勝英は寛政8年没の甲州流軍学者である。従ってこの絵図の作成は寛政7～8年とされる。先に述べたように、上田築城は昌幸であるが、ここでは幸隆と伝えられている。江戸中期にはそのように捉えられていたと思われる。注目すべきは西向き大手という表現であり、上田築城が徳川方の昌幸の上杉対策とすれば、正しいことになる。絵図には西側虎口のみ馬出状の表現が3重にみられ、さらに本丸に枳形が構築され、4重の防備となっている。南に尼ヶ淵、東西と北に水堀、四方に虎口、城内を仕切る土塁が喰い違い虎口、捨て郭、枳形等巧みに表現されている。

では、この絵図について検証してみよう。1つ目の注目点は軍学上の絵図に珍しく、作者とその履歴が明確であること。2つ目は加藤正治が軍学者であり、本絵図以外に30城の絵図を残しており、特に伊那に於いては11点の古城を実地調査し、縄張図を残していることである。此の220年前の古城調査絵図は平成24年伊那の三洋グラビアみまよせホールで長野県の城絵図展を開催した際、伊那古城絵図として公開、現在の遺構図との比較で展示し、NHKの昼のニュースでも放映され、地元の研究者がすぐに来られたという経緯もあり、展示会後、当時未知の城址が絵図に描かれ、発見されるというおまけも付いた。加藤正治は現在の城郭縄張研究者と同じ視点で城郭調査ができる人物であった。上田城は先に述べたように、天正11年(1583年)に構築され、1600年の関ヶ原戦後破壊され、17年の生命であり、さらに、寛永3年1626年仙石忠政の上田築城に依って、その地下に埋没した。真田の上田城を窺い知れるのは此の43年間である。加藤正治が調査した

寛政7年1795年では、すでに、真田の上田城が消えて169年が経過している。今から220年前とはいえ、現地で真田の上田城を窺い知することは出来ない。本図も服部直方の作図であり、岡田勝英の写しをさらに加藤正治が写したものである。岡田勝英は亀井家の家臣であり、甲州流軍学者である。服部直方も同様と考えられるが、判明しない。ただ、同様、服部直方とする絵図は海尻城、海野口城、桑原城、天飾為城とあり、何れも岡田勝英伝来と記する。加藤正治はいずれにも自らの見解を正治曰くとして記載し、上田城についても長文の解説が記されているが、縄張りの根拠は明示されていない。加藤正治が城を観察できる人間として、どのように上田城を調査し、この絵図が出来上がったのか興味が尽きない。

3つ目は築城を真田幸隆としたことである。云うまでもなく、真田昌幸の築城は明白であるが、それ以前に上田に何もなかったかについては、疑問が残る。戸石城の前進基地として、この地は有効であったはずである。

以上、真田の上田城とされる絵図について、検証を試みた。ちなみに、真田氏上田城と思われる絵図として、詳細を省くが、以下の4点がある。

- A. 信州上田之城見取図。北虎口がない他、建築が表示される。
- B. 信州上田城。城郭絵図集の1枚。
- C. 信州上田絵図・上田古城図。真田家事績稿等収載。
- D. 天正年代上田古図。上田市立上田図書館蔵花月文庫郷土史附地図。

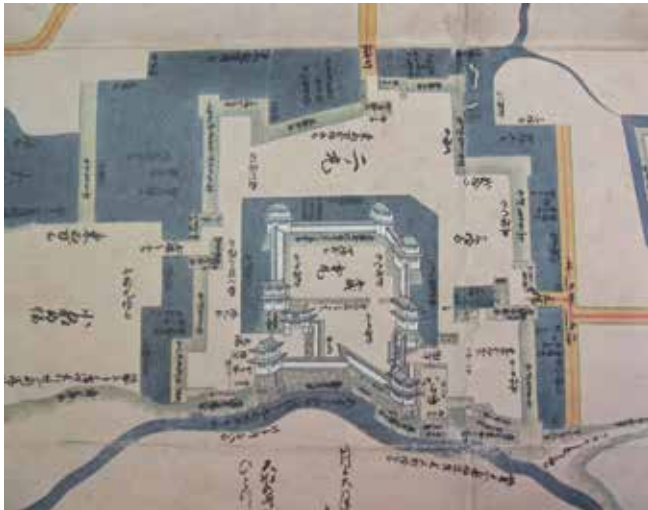


図2 内閣文庫正保城絵図 仙石氏『信州小県郡上田城絵図』

4. 仙石氏の上田城絵図

近世城郭の城絵図の基本は正保年間に国絵図とともに提出された正保城絵図と幕府に提出された災害時の修復願絵図であり、これらは公用図で極めて正確なものであり、この時代変遷を追うことで近世城郭の変遷をたどることが出来る。第3の基本図は明治5年明治政府陸軍省築造局が城郭の存廃を決める際に当時の75都道府県に指示し、前年の305都道府県が実行部隊となり、実施された城郭調査絵図、いわゆる陸軍省城絵図である。この絵図によって、幕末から明治、廃城時の城郭の最終形態を知ることが出来る。これ以外には藩の絵図方等で作成された実用絵図群があり、さらに、軍学等築城研究で作成された主図合結記や郷土史研究、古城調査で作成された絵図、資料群が存在する。

上田城についてみれば、正保4年1647年に信濃国絵図とともに提出された「信州小県郡上田城絵図」が幸いに国の重要文化財となり、内閣文庫に収蔵されている(図2)。文化庁の調査では2.35×1.8mで、閲覧に供するように復刻されている。正保城絵図は元150城余り作成され、幕府紅葉山文庫に収蔵されていた。幕末の混乱の中で官軍が持ち出し、内閣文庫の現存は63城である。ただ、先日江戸東京博物館で展示された高田城絵図のように、今治城絵図等各地で散逸した絵図が発見されていが、全容は把握されていない。絵図の内容については各誌で紹介されているため省略するが、寛永3年

(1626年)の築城後わずか21年の絵図であり、仙石氏の築城当初の姿を伝えていると考えられる。

上田城修理絵図はこれまでの上田市の史料調査や各種出版物に紹介され、現在のところ以下の2点がある。

- E. 元禄15年(1702年)6月『上田城修復願絵図』仙石政明、信州上田城破損之所修復を願候覚。
- F. 享保17年(1732年)5月18日『享保年間上田城普請図』立面図、近藤三二郎氏所蔵絵図

上田市や上田市立博物館、白峰旬の調査によれば、上田城の修理は仙石時代に寛永18年1641年(改選仙石家譜)、貞享3年1686年(仙石家文書)、元禄15年1702年、松平時代の上田城の修理は享保17年(1732年)、寛延3年(1750年)、宝暦7年(1757年)、天明8年(1788年)、天保14年(1843年)、弘化5年(1848年)、安政3年1856年、万延元年(1860年)(城普請奉書留)と11回に及ぶそしてこれらの絵図が残されている、正保城絵図を築城時の絵図として以降幕末までの変遷を追うことが出来る。残念ながら、現在見ることが出来る残された修理絵図は上記2枚のみであり、平面図は元禄15年図のみである。白峰旬の研究によれば、「修理絵図は大名から幕府申請時に事前に表右筆組頭の査察を受ける下絵図、月番老中に提出される下絵図、清絵図、国元の控図がある」とされ、上田には幕府提出清絵図が幕府老中の裏書を以て返却された絵図か、国元の控図が残ることになる。各地に当時幕閣の関係者の控図が見つかる可能性がある。元禄15年図1枚では変遷をたどることは出来ないが、藩政に持ち居られた多くの絵図で以て、上田市ではそ

の変遷を明らかにしておられる。今後新たな修理絵図の発見を願うのみである。

5. 明治の上田城廃城絵図

明治政府陸軍省築造局は明治5年3月15日の陸軍省達に基づき、3月18日から8月24日まで、5か月間、全国の城郭の存廃を決めるために、将校を派遣し、全国3府72県に対し、調査を下命し、前年11月府県統合される前の3府302県が城郭調査を実施した。今日、陸軍省城絵図と総称している富原文庫所蔵98城128絵図である。これらの絵図は平成22年パリで発見され、明治5年の年号と陸軍省築造局の朱印がある。これまで公にされることのなかった幻の絵図群で、そこにはリアルに廃城時の状況が描かれている。絵図は発見時から中国四国が欠落し、前年の調査である関東の絵図が漏れている。それ以外は全国に及び、特にほとんど絵図の残されていない陣屋遺構については唯一の史料も存在する。ところが、本絵図群には上田城は含まれていない。上田城跡は明治4年廃藩置県によって兵部省の管轄となり、8月には東京鎮台第2分営が置かれた。明

治6年1月明治政府は全国の城郭を存城と廃城に分け、上田城は存城とされ、後廃城となり、4月分営も廃止された。陸軍省城絵図の調査は明治6年の城郭存廃を決定するための調査で、明治5年に実施された。当時すでに軍営であった上田城は対象とされていない。平成24年の長野県城絵図展では県下の陸軍省城絵図10城を公開したが、この理由で松本城と上田城のみ展示できなかった。小諸城絵図は本丸図と二の丸図で4mもあり、上田城も存在すれば上田城跡の基本図となる。

上田城は明治6年廃城とされ、陸軍省から大蔵省に引き渡された。上田市の調査では明治6年4月長野県権令立木兼善から大蔵大輔井上馨宛てに「管内城塞払下等処分方向」が提出されている。多くの謎に包まれた城郭遺跡の最終工程である。

城下町屋敷地に於ける新出資料は、

「県庁ヨリ大蔵省江差出相成候控奉全国二仕建差出ス屋敷地全図 控 但六枚二切置 明治六年三月 第二十二区小県郡上田」

と袋に記された6枚の絵図である。提出は4月の管内城塞払下処分に先行し



図5 上田遊園松平神社之図(しろはく古地図と城の博物館富原文庫蔵)

ている。絵図は鉛筆で下書きされ、墨入れの後彩色され、番号が表示される。調査が城郭のみならず、屋敷地に到るまで実施されたことになる。大蔵省には全国二仕建とあり、多くの絵図を検証した結果、長野県所蔵の『上田城郭並士族卒侍屋敷総絵図』とされている絵図が切置前の全図と判明した。総絵図に6分割された絵図の範囲を入れてみたところ、描画内容、範囲とも明確に一致する。第6図が県庁のところで空白部分があり、県庁のところを除外

して後に描き直した形跡がある。県庁図に作成年次の書き込みはなく、明治4年頃と推定しておられる。6切置図は総絵図を南北2分割し、北を東西に4分割、東から1-4とされた、南は上田城の東のみ2分割し、5、6とされた模様であるが、付番は消されている。又、6は失われたか、意図的か後日改変されている。

6・上田遊園地及松平神社之図 明治27年－40年頃の本丸

上田城跡本丸を詳細に描く銅版細密鳥瞰図、26×36cm 同じ絵図が長野県小県郡松平神社之図として、掲載されている物があるが、本図は初見である。図は寸分違うことなしと思ったが、後者には料亭梅の家の文字のみが記載されていない。又、印刷は東京精行社とあり。ここに前者は料亭開業以降明治40年以降、後者はそれ以前

となる。前者は上田遊園地内桂頼母蔵版とあり、御手軽御料理遊園地内桜能家とあり、料亭開業後、版權を買い取り、梅の家の文字を追加刻印して引札として使われた。

作者はいずれも廣方とある。内容は上田城の尼ヶ淵に面する城壁が細密に描写。東虎口の北櫓台に丸山稲荷が奉納され、現存する西櫓がある。松平神社は本社、拝殿、鳥居、社務所、神庫があり、中央に藩校明倫堂、梅の家、西に堂弓場、北に招魂社。東虎口西に演武場が見える。同じく北に遊園とあり、本丸周囲に桜が描かれる。遊園と

いう意味を勘違いしていた。そこに表現されているのは桜だけであった。

上田市の保存管理計画によれば、松平神社、現在の真田神社が創立されたのは明治12年、招魂社の移設が明治14年、上田藩校文武学校の文学校明倫堂画移設されたのが明治16年、演武場は明治27年、料亭が明治40年、大正14年に本丸に弓道場とあり、これが事実とすると本絵図は大正14年以降となるが、先の後者の絵図にも弓道場は描かれており、絵図が銅版であることを考えると、弓道場の開設が逆に明治40年以前ということになり、絵図は明治27年以降彫刻、40年改刻ということになる。

7・まとめ

真田の上田、明治6年切置上田城下町絵図、明治27～40年上田遊園松平神社之図を取り上げ、所蔵者の責任として、その検証を試みた。いずれも初公開であり、ほぼ内容を明らかにできた。本稿作成に際し、絵葉書以外の上田関連資料を整理してみた。城郭図、古城絵図、合戦図、錦絵、古典籍、古地図、文献とあり、上田家御家中記、上田藩主大坂城代御行列帳、上田軍記、千曲之真砂の写本城絵図10枚、前田家調査の戸石城絵図、沼田城代記、上田合戦、戸石合戦、海野平合戦、地藏峠合戦等の絵図、箕輪城絵図、長篠大戦の錦絵に真田兄弟、大阪陣錦絵に幸村、真田流遠町秘伝書15点程の戦前市街地図等古資料120点、いずれ、解き明かしたい。

富原 道晴

1947年大阪生まれ、平成10年『しろはく古地図と城の博物館富原文庫』設立、毎月メールマガジンしろはく活動記録『古地図と城の泉』発刊、平成10年以降、上田で真田関連城郭展4回開催、関西城郭研究会顧問、東京古地図倶楽部、日本銃砲史学会所属、元サカタインクス理事、元日本印刷学会技術委員会グラビア研究会。

明治6年大蔵省提出『上田絵図』の区分図について、定本信州上田城(長野県所蔵)の『上田城郭並士族卒持屋敷総絵図』と比較検討してみたもの。第2、第5、第6区分図は省略した。ちなみに第2区分図には、北に新参町、南北に南から木町、連歌町、七軒町、丸堀が表示されている。第5区分図には、城郭東部城下町入口を表示。下部に断崖、中央に鷹匠町、常田町は西大手前迄、北に海野町、堀際に蚕種原紙賣捌所とある。第6区分図は様式が総絵図と異なる、泉水のある庭園のような曲輪が描かれ、東に古屋舗とその西堀が蓮池として描かれる。北に学校構、上屋敷、馬場、西中央から南に断崖、東の堀と喰い違い門2基がある。

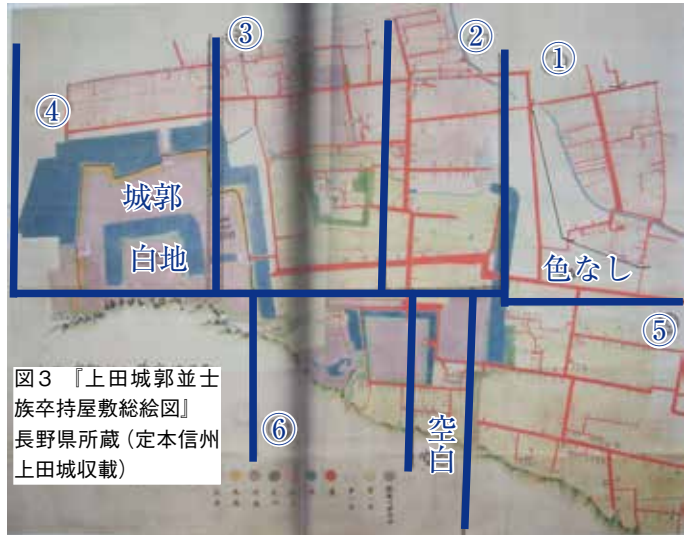


図3 『上田城郭並士族卒持屋敷総絵図』長野県所蔵(定本信州上田城収載)



図4 ①明治6年大蔵省提出『上田絵図』袋題。④第4区分図。上田城二ノ丸北及び西堀を描き、北部鎌原村を表示。③第3区分図。上田城二ノ丸堀と東虎口を描き、東隣接地域南に新参町堀に副って片平町、北に東鎌原町、木町、中央に元



営繕、葭原町を表示。①第1区分図。上田城の東部、中央に水路がある馬場町通りと西の大工町(原町)、川を北に袋町までを地番と地番のないところには上田町と記入。